
バリア

アンデッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バリア

【Nコード】

N7598F

【作者名】

アンデッド

【あらすじ】

いつもと変わらない朝。何気ない日常の片隅で不気味な“異変”が突如として姿を現し、牙を剥く――。100%脱出不能！戦慄のホラー掌編。『“それ”に触れたら、もう一步も出られない』

とても気持ちが良い夢から醒める。

私はあくびをして、けたたましく鳴るデジタル時計を軽く撫でた。不快なデジタル音を奏でていた時計は、大人しく鳴き止む。

——もう一度、さっきの夢の中へ戻りたい……。

私は再びベッドの奥に潜り込んだ。

「奈美ー！ 早く起きないとまた遅刻するわよー！」

ドア越しの階下から母の呼び声がして、女子高生の朝という現実
に引き戻される。

いつもながら朝は苦手だ。

「んー！ もう起きてるー！ 今行くつてば」

私は大声で母に返事をする、しゅしゅベッドから上体を起こし
た。

窓からは暖かそうな陽光が入り込んでいて、部屋を明るくしてい
る。

まだ眠気もあって、少しの間うとうとしてしまふ。

眠いよ……。サボりたいー。

それでも、寝癖でぼさぼさになっている髪を触りながら、床に足
をつけ立ち上がる。

私は頭の上で両腕を広げて、大きく伸びをした。

「うーん」

思いつきり伸びをしたもんだから、つい声が漏れてしまった。
寝起きの声は、なんだか自分でも色っぽいもんだなと思ってしま
う。

首が痛い。寝違えたかな。

私は首に手をやりながら、寝ぼけ眼でよろよろと歩いた。
向こうにあるドアを目指して。
確かに歩いたはずだった。

——え？

歩いても歩いても、ベッドから三十センチ程度までしか進めない。
見えない何かに阻まれて、それ以上は足が出なかった。
ドアまで、辿り着けない。
一気に目が覚める。
何が何だかわからなかった。

「なに、これ」

目の前の宙を手で触ると、何か柔らかい感触があつて。
弾性のあるゴムみたいな感じで、突くと軽く押し返された。
わけがわからない。

——その感触は、ベッドの周囲をぐるりと囲っていた。調べてみ
ると……壁のように、辺り一面隅々まで、隙間なく。

私は、四方八方をでたらめに叩いた。
蹴ったりもしてみたけど、弾き返されてまるでダメだった。

——なにこれ、出られない……！

この異常な状況で、完全に頭も覚める。理解し難い現象を前にして、私の冷静さも五分間で消し飛んだ。

密閉された空間、なんだかエレベーターや押し入れの中にいるような、そんな息苦しさも感じる……。

私は軽度のパニックに陥って、段々と血の気が引いていくのを感じた。顔が青ざめているだろうことが、自分でもよくわかる。

堪らなくなった私は、悲鳴にも似た声で叫び出した。

「お母さん！ お父さん！ 助けて！ 誰か！」

喉が張り裂けんばかりに何度も叫ぶ。

——何の反応もなかった。

近所中に聞こえてもおかしくはないのに。

普通ではない大声を出した喉。そこだけ、ジンジンとした音の痛い痛みが広がった。

その時、

「奈美ー！ もう出ないと遅刻するぞー！」

ベッドからは届かない斜め向かいの場所にある窓、その外から声がした。

あの声は、公平だ——。

一緒に登校するために毎朝うちの前に訪れる、私の幼馴染み。

友達にはまだ秘密だったけど、この前付き合うことにもなったんだった。だから今は、正式に私の彼氏でもある。

安堵と同時に、なんだか涙がこみ上げてきた。

ここからでは窓まで辿り着けないけど、公平が私の声に気づいてくれたら、きっと……。

こうへ——。

その後何の苦労もなく続く予定だった『助けて』という言葉。だけど……私が呼んでも、声が出なかった。

容易に出るはずだった『公平』という名前も『助けて』という言葉も、口から出て声になることはなかった。

私は恐怖を感じて、反射的に口と喉に両手をやった。

「今出る」

見ると、私によく似た女の子が窓を開けて、微笑みながら公平に言葉を投げかけていた。

なんなの？

私は心の中で、そう疑問をぶつけるしかなかった。

「おはようー、奈美。急げー！」

また公平の声がする。

彼女に返事をしているみたいだった。

公平は、彼女のことを私だと思っているようだ。

そんな……私はここだよ！

公平の声を聞いて緩みかけていた心も、畳み掛けてくる一連の不可解な出来事によって、徐々に凍りついていく。

……公平、そいつは私じゃないのに。

頭の中が、何かでかき混ぜられたみたいグチャグチャになる。恐怖と悲しみで混乱した頭は、自分ではどうしようもなく、耐えられもなかった。

公平に返事をしたい、助けを乞いたいのに……。声が出ない以上、それは叶わない。

彼女は窓を閉めその場から離れると、いそいそと髪を整えたり制服を着たりしていた。

それは私の代わりに、登校の準備をしているようだった。

私は――彼女がそうしているのを、ずっと見ていた。膝から崩れ落ちて、見えない壁を叩き、出ない声で泣きながら……。

自分が毎朝やっていることを、端から見ているという不気味な感覚に打ちのめされる。

目の前の彼女と今の私が一致せず、涙で視界が歪んだ。

底知れない未曾有の恐怖を感じて、身体の震えが止まらない。何かに押し潰されそうで、心と体が悲鳴をあげた。

昨日の晩御飯から私は何も食べてない。だから胃の中は空っぽのはずなのに、それでも胃液と一緒に中身が逆流しそうになる。

全ての準備が済んだ彼女は、何事もないかのようにドアへ向かっていた。

ドアノブに手をかけてそれを回しドアを開くと、いつも通り部屋から出て行くとする。

そして部屋を出てドアを閉めようとする直前、彼女と私の目が合った。

彼女は、確かに笑っていた。

「そこで朽ちていけ」

残された冷たい言葉と共に、ドアが完全に閉じられる。

——私は、なぜか自分の手足をじっと見つめていた。

爪が根元から剥がれていた。

小指の先は溶けていて、まるで腐った林檎を思わせる。

床には、抜けた歯も転がっていた。

（後書き）

バリア【b a r r i e r】

1 障壁。防壁。

2 障害物。

実は僕の短い小説歴で初の本格的ホラー掌編であり、初の女主人公一人称でもあります。

ポップでヘビーなホラーを目指しました。最終的には洋物ホラーみたいな印象になったかもしれません。

夢か妄想か、異星人の侵略か、多重人格か、或いは双子の呪いか超能力か。はたまたドッペルゲンガーが本物とすり替わる瞬間を見てしまったのか。

定かじゃない話にしました。

実はキャラの名前には、双子に近しいとあるトラウマ的な作品を元ネタにしてます。

何か分かりますかね。ゲームなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7598f/>

バリア

2010年12月4日04時36分発行